

ウルトラQ The Midnight

綺亞羅

第三稿

脚本／小中千昭

Teleplay by Chiaki J. Konaka

2004\01\31

登場人物

坂口 理(38)……………ジャズ・ベーシスト

田中 正春(37)……………レコード会社A&R

綺亞羅(外見/14)……………妖少女

久我 潔(30)……………若手ピアニスト

バスター・カーランド(57/当時)……………1950年代のジャズメン

刑事 1

刑事 2

警官 4～5名

警備員

田中の部下の女(25)

コンビニ・バイト

闇の中の種族

○ジャズ・クラブ

その場所の暗く淀んだ空気は、昭和三十年代から微塵も変化していないかの様。

ピアノとベースのデュオが、スロー・バラッドを演奏している。

ベーシストは必死に、未だ若く才気溢れるピアノストのプレイに追従しようとしている。

▼固定カメラ画面に映る二人のジャズメン

演奏が終わった。疎らで殆どいない客席から、わざとらしい拍手。わざとらしい返礼。

ベーシスト、ホッと息をつき、客席を見回す。

坂口「——？」

ぼうっと、まるでそこにスポットライトが当たっているかの様に、客席の奥の隅に、場違いな少女が座っており、じっと坂口を見つめていた。

ピアニスト久我「はいどうも。今の曲は僕のオリジナルの『キキモラ』でした。次は、今夜、急遽ゲストで来て貰ったベスの坂口さんをフィーチャーして、バスター・カークランドの——坂口さん？」

坂口「(はっとなり)あ、はい(と構え)」

久我「(指でカウントしながら)小声)いくよ。ワン——」

坂口、再び客席に目を向ける。

坂口「!？」

少女がいた筈の場所は漆黒。

久我「スリー、(フォー)」

○多摩堤／未明

川沿いの暗い道を走る、古いワゴン車。運転しているのは坂口。MDの音が流れだす。

坂口「(小さく舌打ち)——出遅れてやがる……」

○フラッシュ／ジャズクラブ(音楽そのまま続く)

ステージが終わり片づけている坂口。と、久我来て
久我「坂口さん、お疲れでしたー」
坂口「あ——、また、呼んでくれよ」
久我「（やや困った顔で）——そう、ですね……。じゃ」
坂口「——」

○バン車内

聴き続けるのに堪えられず、音を消す。
坂口「……（苦渋）」
と——、暗い道の向こうに、ぼうっと白い影。
坂口「？（目を凝らし）」
まるで時間が瞬間に欠落したかの如く——、車のすぐ前方に立っている少女の姿が。
坂口「おああっ……」
咄嗟にブレーキを踏みながらハンドルを回す坂口。

坂口、真横を向いて停止した車から飛び出す。
暗い街灯の下に、倒れている少女。

坂口「大丈夫か？」
坂口、駆け寄ってそっと抱き起こす。
この寒い朝方に、古い型の薄いワンピースを着た、あどけない顔の少女。外傷は見えないが意識無く。
坂口、少女を抱き上げようとして——

坂口「痛ッ」
少女の背中を支えようと添えた左手を見る坂口。
坂口「（少女の背側を覗こうとし）何入ってんだよ……」

○コンビニ／監視カメラ画像

店内を監視するカメラに、慌てて入ってきた坂口の姿が映る。牛乳、タオルなどを慌てて買い込む。

○工場街

廃工場の敷地に入っていくバン。

○坂口の部屋

ガランとした廃工場の一棟。練習用のベースが主人を待っていた。

少女をソファにそっと横たえる坂口。

坂口「(呟き)なんでこんなに冷たい——、まさか……」

坂口、少女の鼻息を聞こうと顔を近づける。

すうすう……。微かに吐息が聞こえた。安堵する坂口——。あまりに顔を近づけ過ぎていた事に気づき、ハッと身を引いて、部屋を見回す。

戸棚を開け、気づけになるものを捜す坂口。

戸棚の奥に、嚴重に封がされたスコッチ瓶。それを手にとろうとし——、激しい煩悶——押し戻して扉を閉じる。

奥から毛布を持ってきた坂口、少女がいない事に気づく。

坂口「!?」

ソファには、水が滴っていた。

坂口「どこ行った!?——おい!?!」

隠れられる様な場所は、ない。呆然と佇む坂口——。

○レコード会社オフィス／エントランス／翌昼

▼所在無げに立っている坂口を捉える監視カメラと、奥から出てくる、坂口と同年配の男。

田中「坂口」

坂口「(微笑)やあ」

田口は手にLPレコードを持って来ていた。それを見せびらかす。

田 中「ついに見つけたんだ」

坂 口「——バスター・カークランド？　こんなのがあったっけ」

田 中「……。鈍い奴だな。何番て書いてあるよ」

坂 口、ジャケットの裏を見ると、「1553」

坂 口「え……？」

田 中「栄光のブルーノート・レーベル、欠番の1592番だ」

坂 口「有り得ないだろこれ……」

田 中「ジャズ黄金時代を築いたブルーノートの1500番台には二枚の欠番がある。1553と1592だ。1592はお前も知ってるだろうが、ソニー・クラークの未発表盤として後にリリースされた。だが、1553は最初から存在していない、筈だったよな？……（ニッ）」

坂 口「ベースを抱えた、枯れた黒人の相貌のジャケット。バスター・カークランド、ソロ吹き込んでたんだ……」

○昔の記録映画（B/W）

暗いステージでベースを抱え、誰かと喋っている初老の黒人。

田 中「（オフ）サンプルを少しだけプレスして、プロデューサーのアルフレッド・ライオンがマスターごと没にしたらしい。こないだウチのアーティストのレコーディングがニューヨークであった時にな、スタジオの倉庫でさ——」

○カフェ店内（レコード会社ビル1F）

テーブルにLPが置かれている。

坂 口「聴きてえなあ……。どうだった？　バスターのプレイ」

田 中「危うくオークションに掛けられるところをさ、うまく言いくるめて買い取ってきたっていう」

坂 口「（やや苛立ち）バスターのプレイだよ！」

田 中「ああ、イマイチだったかな。何かブツブツ喋ってるのが入ってたりさ。ライオンが没にしたのも判るっていうか。ああ、お前、学生ン時からバスター好きだったよな」

坂口「――」

田中「酒に溺れて、天使が憑いたとか言い周りの、終いには病院で野垂れ死に……。俺は好きなタイプじゃない。今度CDに焼いといてやるよ」

坂口「――田中……。ついでも何でもいいんだけど、何か仕事、無いか……。トラでも何でもいいんだけど」

田中「……。お前さ……。いい歳して会社辞めてまでしてさ、ベース弾いての、どうなんだろう」

坂口「――俺は、ちゃんと食えてる……」

田中「あんなところに住んでか。国民年金払ってんのかよ」

坂口「……」

田中「自分だけ、好きな事やって生きていいなんて思うのは間違ってるんじゃないか？」

坂口「……」

田中「もう若くないんだぜ？俺たちさ。お前だって――」

田中「うがっっ」

坂口「!?」

倒れ込んだ田中を見下ろす様に、あの少女が立っていた。氷の様に冷たい視線。

坂口「お、お前……。何でここに……」

田中「(必死に取り繕う)――坂口、お前の知り合いか」

坂口「知り合っているか……。昨日――」

田中、身繕いし伝票とLPを手にとる。

田中「――大概にしとけ。今はこういうの、犯罪になるんだぞ。仕事はなんか考えといてやる」

田中、レジに向かっていく。

坂口「――何で、あんな事した」

少女は坂口をじっと見つめている――。

○田中のオフィス

フロアに戻ってきた田中、自分のパーティション内

に入り、LPを無造作に机脇に投げる。

田中「——（慄然）」

と、向こうから女性社員が呼ぶ。

女性社員「田中さん、A&R会議、始まってますよ」

田中「（苛立たしげに）今行くって」

机からノートパソコンや携帯をかき集め出て行く。

○繁華街

不似合いな二人連れ。坂口と、少女が歩いている。

坂口「——あいつは、あれでも学生時代はスティヴ・ガッドのコピーやらせたら日本一のドラマーだったんだ。すっかり偉くなっちゃってるが、あいつは昔からああなんだ。あれでも俺の事を心配してくれてんだ」

と、突如少女、立ち止まって坂口を睨む。

少女「あの人があなたの事、どんなに莫迦にしても、あなたは心配してくれてるって有り難がってんだ」

坂口「——（慄然）」

少女「自分で鼻面殴ってやればいいんだ（挑発的に微笑む）」
坂口「——（苦笑）」

○田中のオフィス

長い会議が終わり、人が疎らになったオフィスに戻ってくる田中。ふと、机に目をやる。

田中「！——」

机の上にはあのLPが無く、バケツでぶちまけた様な水が滴っていた。

○坂口の部屋

練習用のエレクトリック・アンプライトベースを弾いている坂口。少女はソファにもたれ、聴いている。

○昔の記録映画

バスターがスツールに座り、カメラに向かって何かを喋っている。

○田中のオフィス／警備室

防犯カメラの映像が多くのモニタに映し出されている。その中の一つ、ビデオが巻き戻されている。と、オフィス内へ入っていく、少女の姿が。それを見つめる田中、憎悪に顔を歪める。しかし、そこに映る少女の姿は、フレームが飛んだりして乱れている。

警備員「（操作をしながら）あれー？　っかしーな……」

田中「——（構わず）警察を、呼んでくれ」

○坂口の部屋

練習に疲れた坂口、ベースを置いて

坂口「腹減っただろ。何か作る」

坂口、奥に向かっていく。

坂口「（背オフ）なんか嫌いなもんあるか？」

と、部屋に流れ出す古い録音、バスターのプレイ。

坂口、ゆっくりと振り向く。

プレイヤーの前に立ち、目を閉じバスターのプレイに身を委ねている少女。

坂口、我を忘れ、少女のミューズの如き姿に見入っていた——が——、その音源が何であるのか悟る。

ぶっ。カートリッジを持ち上げ、音楽を止めた。

無然と坂口を見つめる少女。

プレイヤーの横には無造作にジャケットがあった。

坂口「何でこれがここにある」

少女「あんたはこれが聴きたかったんでしょ。（悪戯っぽく笑み）あんな奴なんかこの音楽の美しさは判らない」

坂口、少女の腕を両手で掴み揺する。

坂口「何で勝手になんか持ってきた二 そんな事していい筈ないだろ三」

少女「——（顔を近づけ）意気地がないのね」

坂口「——何だと」

少女「思い通りに生きてるつもりで、結局他人の顔色ばかり気にして逃げ場所ばかり探してるんだわ」

坂口「——」

唇を噛みしめ、少女を睨んでいた坂口、少女を突き放し、奥へ。

戸棚から嚴重な封がされたスコッチを取り出す坂口。
乱暴に封を剥ぎ取る。

少女はじっとその坂口の後ろ姿を見ている。

坂口は琥珀の液体をそのまま嚥下していく。

激しくむせて尚、飲み続ける。

時間が、ゆっくりとした流れに。

瓶が床に落ちて破片と散る。

○ジャズ・クラブ

ステージを写す固定カメラが坂口を捉えている。

田中「（オフ）坂口は、7年前に心臓で一回倒れたんです。体質もあるんでしょうけど、あいつの場合、酒が毒だったみたいで——」

真剣に音楽と対峙する坂口——。

田中「（オフ）手術の後、あいつは会社を辞めて、好きな道で生きていく事にしたとか言って——」

○警備室

廊下で、警官に話をしている田中。

部屋内側では、さっきの警備員がしきりにビデオを見返している。

警備員「——何だぁ……?」

ジョグでフレーム毎に送っていく。

オフィス・エントランスには、少女の姿がランダムに映っている。そして——、その背には何か霞がかった白いものが映っている。

それだけではない。

少女の周囲には、得体の知れない不気味なものが数フレにコマづつ、映り込んでいた。

あるフレームで静止させると——、その不気味なもののがカメラを覗き込んでいる。

警備員「うあっっっ!」

○古い記録映画

無人のステージ、バスターは酒のグラスを手に、何かぶつぶつと呟きながら歩いている。

坂口「(モノ)バスター・カーランドは、奇矯な行動のエピソードの方が有名だけど、俺は何より、彼の弾くベースの音が好きだった……」

と、バスター、ゆっくりとカメラ、否、客席に立っている坂口の方に振り向く。

坂口「会えるなんて、思ってもいなかったよ……」

バスター、ニッと笑い、グラスを掲げ飲み干す。

○坂口の部屋

黄昏の光に包まれた室内。

胸をかきむしる姿で倒れている坂口。

少女が屈み込み、哀しそうな顔で見つめている。

と——、少女の背が盛り上がっていく。何か異形の姿へ変容しようとしている。

ワンピースの背中が破け、何か角質が突出。

そしてその下から、濡れた羽根が広がっていく。

薄羽蛭螭の様な羽根は、広がると、今度は坂口の躰

を包み込んでいく。

坂口「(モノ) そうか……。お前は、バスターのところに見れ
たっていう、天使なんだ……。 (優しく) 俺みたいな三
流のところに来るなんて、ちょっと間抜けじゃないか？」

ゆっくりと——、目を覚ます坂口。

少女は、じっと坂口の躰を抱いていた。だが、羽根
はもう見えていない。

坂口「——(深く息を吐く)」

少女、微笑んだ。

と、そこにノックの音。

声 「坂口さーん。いらっしゃいますよねー」

坂口、ゆっくりと起き上がる。

坂口「は、はい。どなた？」

声 「城西署の者ですー。ちょっとよろしいですか」

坂口「警察……？」

▼刑事が持つビデオカメラの映像。

扉を開ける坂口が映る。

カメラを構えているのは若い刑事。中年の刑事が坂
口に話しかける。

刑事1「坂口理さんですね」

坂口「はい」

カメラは室内を覗き込む様に進入。と——

カメラを睨んで立つ少女。

刑事2「(オフ/刑事1に) いました」

刑事1「ちよっと署までご同行いいですかね」

坂口「えっ……。何で——」

刑事1「ちよっとね、盗難と、未成年者の諸々な届け出てまして
ね。詳しくは署の方でお話ししますんで、取り敢えず同
行願えますか」

坂口「——判りました」

坂口、少女の方に振り向く。

哀しそうな顔で坂口を見つめる少女。

坂口「——じゃあ、な」

少女「——」

○工場街

刑事と制服警官に促され、外に出てくる坂口。外にはパトカーと覆面車。

○坂口の部屋／刑事2のビデオカメラ映像

刑事2「君も一緒に来なさい」

少女、刑事の顔を、睨んだ。

刑事2「——？」

少女の後方に広がる暗い陰の中から、蠢き出す異形の者達の影——。

刑事2「なっ——、何……」

巨大な細身の巨人、矮小な鬼らが、少女を護るかのように接近してくる。

○工場街

車に乗せられようとしている坂口。

と、建物から聞こえる男の悲鳴。

刑事2「ぎゃあああああ——」がああああああ——

坂口「——何だ？」

刑事1「どうした？」

刑事1、坂口を置いて様子を見に行こうとする。と、入り口に少女が立っていた。

刑事1「——何があったんだ？」

少女を遠巻きに囲む制服警官二人。

▼少女のPOV

刑事2、そして警官二人の少女を見る顔が即座に

恐怖へ。

刑事1「(くぐもった声)お、お前何なんだ……」

少女、坂口のところに駆けてくる。

坂口「何をしたんだ」

少女「何もしてない」

刹那、逡巡する。が、坂口は決意した。

坂口「来い」

少女の袖口を引っ張り、走り出す坂口。

路上駐車していたバン車に乗り込む坂口。そして少女。エンジンの掛かり、走り出す。

尻餅をついていた警官達、立ち上がり、パトカーの無線に飛びつく。

警官「(オフ)ナンバー、品川45——」

○車内

暫く黙っている二人。

少女「——どこに行くの？」

坂口「——(苦笑)」

少女「——？」

坂口「どこに向かうか、考える時間はたっぷりあるからな」

少女「……(思案)。——(ぼんやりと外を眺め)随分、窮屈になっちゃったんだね……、ここも……」

○街路

道に被さるNシステムのカメラが、坂口のバンのナンバーを捉えていた——。

○車内

黙って運転している坂口。

ギアの脇に置かれた左手は、少女の掌の近くに。だが決して触れようとはしない。

坂口の手を見つめていた少女――。

少女「――どうして――何も聞かないの？」

坂口「え……」

少女「あたしが誰かとか、どこから来たかとか――」

坂口「――そうだな。何で聞かなかったんだろう」

少女「……」

坂口「――俺は、自分自身が意外過ぎて驚いてる」

少女「――」

坂口「――俺に、こんな破滅型の指向があったなんて（自嘲）」

少女「――あたしは、キアラ」

坂口「――そうか……」

――溶暗

○田中のオフィス

電話を受けている田中。

田中「えっ……。 （強張った顔）坂口が……。 ――はい……。

判りました……」

受話器を置き、深い息を漏らす。

と――、受話器の横を見て凍りつく。

田中「な……」

そこには、それまで無かった筈のブルーノート盤。

咄嗟にそれを机の下に隠す田中。

田中「……（煩悶）」

○郊外のコンビニ／控室

監視カメラが、坂口と少女が入ってきた姿を捉えている。マンガを読んでいたバイト、二人連れに嫉妬したのか、モニタに映る少女に指で悪戯。

○同／店内

坂口と少女は、まるでピクニックに行くかの様な笑みを交わしながら、食物等をバスケットに入れる。

○同／控室

そろそろレジに立とうかとマンガを置いて立つアルバイト、チラとモニタを見て——慄然。

店内に蠢く無数の異形の影。

巨人の様な姿もあれば、小さな生き物らしき影も。

また、空気の中を泳ぐ魚の如きものまで。

アルバイト「——う、うあああっ！！」

○丘の上の公園／夕刻

公園の入り口近くに置かれているバン。

多摩の新興住宅地を見下ろす丘上の公園。

少女はベンチに腰を下ろし、坂口がベースを弾いているのを黙って見つめている。

いつしか坂口のベースに、どこからかピアノの音が重なっていき——

○古い記録映画／病院のテラス

両手を拘束されたバスター、日差しの下で、至福の笑みを浮かべながら虚空を見つめている。

坂口「(モノ)天使が見えていた、バスター・カークランドは本当に不遇なジャズメンだったのだろうか……」

○田中の会社／試聴室

LP盤がターンテーブル上で回っている。

立ったまま、じっと聞き入っている、田中。

▼インサート／若い頃の田中と坂口。

コンボで演奏を楽しんでいる――。
田中の閉じた目から、涙が。
閉じた口から、嗚咽が漏れる。

○公園入り口

坂口の車があるところに、パトカーが集結。

○公園

ベースを弾いていた坂口、向こうから警官が集まってくるのを見て、手を止める。
少女、立ち上がり、坂口の側へ。

○試聴室

床に座り込み、泣いている田中。

○公園

無線で交信しながら、坂口を取り巻いていく警官達。
坂口、穏やかな顔で、少女を見つめる。
少女、手を差し出した。

坂口は、刹那逡巡するも――、その手を握る。
警官達は、「やめろ」と口々に叫びつつ走ってくる。
崖の上から、坂口は、ベースと共に落ちていく――

○炎の中

燃え盛る炎中で、存在を失っていくブルーノート盤。

○崖下

駐車場となつてゐる未舗装の地に、叩きつけられ破
砕するベース。

崖上から暗然と見下ろしている警官達。

砕けたベースの側に、うつ伏せで倒れている男の屍。
その周囲に集まってくる若い人々。申し合わせたか
の様に、一様に携帯カメラのレンズを屍に向けた。

——溶暗

○繁華街／夜

部下の若い女と連れ立って歩いている田中。他愛な
い会話。だが、田中の顔には疲弊した影が。
繁華街の喧騒の中に、持続する低音——。

田中「……？」

ふと顔を上げる田中——。

田中「——!？」

夜空を飛んで行く、美しい羽根。

それはそこからかなり遠くの空である筈なのだが、
田中には、それが少女と、少女に抱かれた坂口であ
る事がはっきりと見えていた。

「どうしたの？」と袖を引っ張っている女に構わず、
田中は飛び去っていく羽根をじっと見送っていた。

「——羨ましかったんだぜ、俺は……」

ナレーション「ブルーノート1500番台の欠番、No.1553は、今も、
そしてこれからもずっと、欠番となっているのです」

終